

10年後の寺院のための選択

平成27年（2015）、鵜飼秀徳師（ジャーナリスト）が『寺院消滅』（日経BP 2015）で提示した「全国7万7千カ寺のうち3割から4割が消滅する」との試算が話題になった。

感覚的に理解はしても、数字で見ると暗澹たる思いになる。試算が出たのがつい最近のようだが、既に5年の年月が経った。我々が足踏みする間に時は駆け抜ける。

平成30年（2018）1月、現代宗教研究所では、寺院統廃合に多く取り組む臨済宗妙心寺派の久司宗浩師（当時は、白隠禅師二百五十年遠諱事務局事務局長）にお話を伺った。久司師は、統廃合の説明とともに、

経済的に困窮した寺院が、食うに困って国法に触れるような様々な問題を引き起こして潰れていく事例もあった。そうした「最期の悪あがき」を見たくない。寺院数を多く保とうとして共倒れをするより、たとえ寺院数を減らしても、強固な寺をつくり、10年後に残すための持続可能な形にすることを選択し寺院の統廃合を進めることとなった。

とその胸中を語った。何事も追い詰められてなし崩しに行うのではなく、10年後に寺院を存続し教えを紡いでいく、その視点を持つ重要性を示唆している。

ジョアンナ・メイシー氏（仏教哲学者）は、『アクティブ・ホープ』（春秋社 2015）にて次のように語る。

アクティブ・ホープ、積極的な希望とは、自分が望むものを実現する過程に積極的に参加する…（中略）…自分が何をもたらそうとし、何のために行動し、何を表現するのかを「選択」するのだ。成功の見込みを推し測り、うまくいきそうだと感じる時だけ行動を開始するのではなくて、意図を定め、そしてその導きに従うのである。

今後、我々教師1人1人の選択が「現状取りうる手段として安全か」よりも、宗祖降誕800年の今から、宗祖750遠忌を迎える10年後に、どのような寺院・宗門の姿をイメージして注力するのか。それを選択するときは「既に」訪れている。